

ハブルータ学習についての考察

志 賀 温 資

An Introduction to the Chavruta Learning Method

SHIGA Atsushi

名桜大学紀要 第24号
2019 年 3 月 抜 刷

【研究資料】

ハブルータ学習についての考察

An Introduction to the Chavruta Learning Method

志賀 温資

要旨

この研究ではハブルータ学習法について論じ、主体的学習の効果的一方法として紹介する。この学習方法はユダヤ的教育施設イエシバをはじめ、その小中学校でも取り入れられ、最近ではインターネット上においても普及している。また、その特徴と効果についても触れる。

キーワード：ハブルータ、対話、ユダヤ、トーラー、タルムード

I. はじめに

少子高齢化が加速している日本で「主体的な学習」が提唱されている。しかし、小中高の教育現場に目を向けると、教師は戸惑っているようも見える。教師向けのアクティブ・ラーニング本の多さがそれを物語っている。他方で社会のあらゆる分野で毎日耳にしない日はない言葉がグローバリズムである。教育界においても例外ではない。分野こそ違え、全員が世界を相手に生き残りを賭けて走らされている観を呈している。

この考察においてはハブルータ学習というユダヤ的教育施設の間で成果を上げている方法について紹介し、その特徴を述べる。

II. ユダヤ的教育の背景

1. 考察の諸前提

この考察においては、ユダヤ教徒＝ユダヤ人として考察を進める。イスラエルの市民登録法によれば、「ユダヤ人を母とする者」と「ユダヤ教への改宗者」をユダヤ人と定義しており、同国の帰還法には「世界中のユダヤ人はアリヤー（帰還、語義的には上ること）する権利がある」としているから、上記の定義に当てはまれば、当人はすみやかにイスラエルに移住でき、国民となれるからである。しかし、ここでは改宗者ユダヤ人は考察の対象とはしない。誕生のバックグラウンドが自ずと違うからである。

ユダヤ人と密接に結びついているのは、言うまでもな

く聖書とタルムードである。それらはいわば不可分である。これらを抜きにユダヤ的教育を論ずることは不可能である。ユダヤ人は「契約の民」であり「書物（聖書）の民」であるとされる。しかし、彼らの観念中に自らを宗教とする考えはまったくない。むしろそれは「教え」であると考え。ここでは以下に、必要な最低限の用語について簡単にふれる。

2. 諸概念

1) 聖書をめぐる名称の相違

われわれの観念では

旧約(聖書)＋新約(聖書)＝聖書

と知られている。しかし、ユダヤ人において、聖書(The Bible)は旧約(聖書)のみである(以下、旧約のみを聖書と呼称する)。しかも、彼らにとって聖書は「古い」ものではない。今も生き生きと彼らの生活を支えている書物である。彼らはそれをタナハまたはタナク、あるいはハ・セファリームと呼ぶ。

2) タナハ (Tanach)

タナハ、あるいはタナク(ここではタナハに統一して呼ぶ)は、

- ・トーラー
- ・ネビーム
- ・ケトゥビーム

のそれぞれの頭文字を取ってこう呼ぶ。これらは聖書

の三大区分である。呼称はわれわれが高大協とか、経団連と呼ぶのと似ている。もう一つの呼称ハ・セファリームは The Books の意味である。

ア. トーラー (Torah)

トーラーは聖書のはじめの五書、すなわち「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」を指す。この五書の呼称はタナハのギリシャ語訳たる七十人訳 (Septuagint) からのものである。原典ではそれぞれ、BeRe'ShYT (ベレシート、初めに)、SheMWT (シェモート、これらの名)、VaYiQRa' (ヴァイクラ、そして言われた)、BeMiDBaR (ヴェミドバル、荒野にて)、DeBaRiM (デヴァリム、これらの言葉) である⁽¹⁾。

これらの名はそれぞれの書の最初の一語あるいは数語からとられたもので、おそらく巻物の最初に見えた言葉をそのまま用いたものであろうと考えられ、きわめて古い時代の様子を伝えている。

トーラーは、従来「律法」と訳されてきたが、語源的には「射る」(ヤラー, YaRah) という語から派生したもので、心の的にしかと受け止めるべき「指図」「教え」の意味をもつ。トーラーは、BCE1290 年頃シナイ山でモーセを介して神から与えられたと信じられている。BCE は Before Common Era で、ユダヤ人はイエスをメシアとして受け入れていないから Before Christ (B.C.) を使用しない。同様に A.D. (Anno Domini) も使用せず、CE (Common Era) と表記する。

イ. ネビーム (Neviim)

これは「預言者たち」の意味である。ヨシュア記から十二小預言書までの二十一巻を指す。ここにはルツ記、歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記、ダニエル書は含まれない。

ウ. ケトゥビーム (Ketuvim)

これは「書かれたもの」という意味である。ここには詩篇、箴言、ヨブ記、雅歌、ルツ記、哀歌、コヘレト、エステル記、ダニエル書、ネヘミヤ記、エズラ記、歴代誌の十二巻を含む。

エ. ミシュナ (Mishnah)

この語は「反復する、繰り返す」意の「シャナー」から派生した語である。トーラーにはモーセが神から直接授かった「書かれたトーラー」(Torah Shebiktav) の他に、モーセから口伝で伝わってきたトーラーがあると伝統的に信じられてきた。これを「口伝のトーラー」(Torah Shebeal-Pe) といい、モーセから連綿と長老たちに伝えられてきたと信じられている。従って後者はもともと書かれたものではなく、暗唱によって伝承者に伝わってきたも

のである。長年にわたり暗唱され、学ばれ、そのテーマについてくり返し議論されてきた成果がミシュナとなった。いずれのトーラーも権威あるものであり、イスラエルの民を律するものであったが、古代とはいえ時代は否応なく進歩し、その教えをいかに当時の生活に適用していくかは常に議論的であった。最終的にこれらの議論が積み重なって多方面にわたり、書き記されるに至った。BCE400 年からCE400 年ごろに書き記されたと言われている。ミシュナは6部に構成され、その各々がさらに区分されて全部で63に区分され、さらに章分けされて全525章になっている。

オ. ゲマラ (Gemara)

ミシュナは成立してみれば「書かれたトーラー」のおよそ五倍の分量となった。その各章は徹底的に議論され尽くしたものであったから、それらに対する解釈と注解も付け加えられるようになった。それがゲマラである。ゲマラは主にアラム語で書かれている。これはアッシリア帝国時代にシリア砂漠から同帝国に侵入してきたアラム人たちが用いていた言語で、アケメネス朝バビロニア時代には公用語となった。この事情はイエスの時代にユダヤ人がアラム語を話していた事情を説明する。

カ. タルムード (Talmud)

タルムードは上記のミシュナとゲマラを合わせたものである。タルムードにはバビロニアでCE5世紀ごろに編纂されたバビロニア・タルムードと、CE4世紀ごろに編纂されたパレスチナ・タルムード(エルサレム・タルムードともいう)の二つがある。バビロニア・タルムードの方が浩瀚で全二十数巻、一万二千頁もある。百科事典のようなボリュームの体裁である。

キ. ラビ (Rabbi)

ラビとはタルムードをマスターした教師のことである。字義的には「我が師」のことである。しかし、ただの教師ではない。彼らはその知識と知恵をかわれ、各地にあるユダヤ人コミュニティ、従ってまたそのシナゴグに請われて赴任する。キリスト教会でいえば牧師に相当するが、実際はまったく違っている。むしろそのコミュニティの調停者であり、持ち込まれた訴えを聖書やタルムードを丹念に調べ上げて裁定をくだす。また、相談事のカウンセラーでもある。

III. ハブルータ

1. ハブルータの実際

ハブルータとはアラム語起源のヘブライ語である。それは「友、仲間、同僚」などを意味するハベル (Chaver)

の派生語である。現代においては対話的学習で学び合うパートナーの意味で使われている。ハブルータはイエシバと呼ばれるユダヤ教神学校、あるいは大学院でタルムードの学習・研究において採られている学習法である。学生たちはそれぞれのハブルータとともに向き合っており、交代でテキストを読み合い、テキストの主題について討論しあう。

討論するには文章をよく理解する必要がある。その文の主張に耳を傾け、分析する。その上でどちらかが口火を切る。「この主題の趣旨は何か」を相手に問う。相手はその理解したことを、明確な根拠を提示して述べる。根拠ははっきりと示されねばならない。それについて他方は質問をする。「その説明はよく理解できない、何かもっと別の方法で説明できないか」等々。その見解に対して、「いや、ここはこういうことではないか」と、根拠を示して反論する。双方が同意すれば先に進む。ということが延々と授業の終わりまでくり返される。

お互いが生徒であり、教師でもある。従って相手の言うことにはじっくりと耳を傾かなければならない。互いに信頼して学習を進めることは基本である。

学生たちは授業時間に先だってしっかりと調べてこなければならない。そうしなければ授業自体が成り立たない。学生は授業時間に数倍する時間を予習に費やす。

2. ハブルータの特徴と効果

ミシュナの内容をみても、また現代のイエシバの学びの現場でもその学びの方法は、対話に始まり対話で終わっていることがわかる。対話には相手の主張に集中し、傾聴する姿勢が不可欠である。その上で相手の提示した意見を理解・分析し、自らの意見と調和させなければならない。何らかの結論に達しなければ、次へは進めない。しかし、決して妥協的な結論にはならない。しっかりとした根拠を提示し、二人が共同作業で出した結論には、まったく新たな見解に達することも稀ではない。それは自ずと共同研究の様相を呈する。

これらの学習実践を通して、各学生は論理的に考え、相手の意見を的確に分析し、同時に自分の意見に対する批判を受け入れることを学ぶ。いずれも彼らがラビとなった暁にはきわめて実践的な能力である。

さらに必要なことは、テキストに耳を傾ける姿勢を身につけることである。この場合、テキストはトーラーに遡るものである。トーラーを現代生活にどのように調和させて実践するか、また持ち込まれる個々の相談事をどう裁定し、調停するか、タルムードの森の中から根拠を見出し、組み合わせ、解決方法を提示することは、まさに知的活動そのものであり、公平と倫理を実現することである。学んだことを実践しなければ、学んだことは無意味である。

3. ハブルータ学習法の拡大

ハブルータ学習は現在、イエシバにとどまっただけではない。イスラエルやアメリカのユダヤ人小学校でもこの学習法が広く採用されている。彼らがテキストにしているのはトーラーである。イエシバではタナハはすでに学んだものとの前提で進められるから、タルムードの学習がメインである。これらの小中学校ではテキストはこのようなベーシックなものだが、子どもたちの学習は真剣そのもので、大人顔負けである。そして、彼らの中からこの学習法のリーダーが続々と誕生している。その意見を述べる落ち着いた明快な態度には驚かされる。これらの小中学校においても聴く姿勢とともに、自らの主張をはっきり言い表すことが強調されている。その一人の子どもはこう言っている。

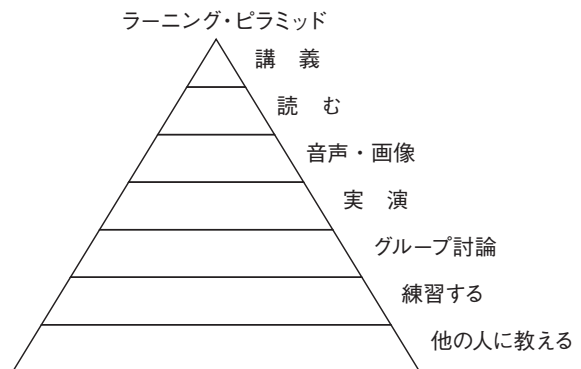
「人類が生き残る唯一の道は、わたしたちにとって会話なのです」

現在ではハブルータ学習法はさらに拡大し、インターネット上のハブルータも多数存在する。すなわち全世界に拡大しているということである。チャットやビデオコンファレンシング、スカイプなどを用いたハブルータである。

IV. 考察

日本においてはアクティブ・ラーニングが教育界の話題となって久しいが、進め方やどう授業に活かすか、明確な形を模索しているように感じられる。

そこで、アメリカの National Training Laboratories が示した Learning Pyramid という学習定着率の概念図を援用してみる。



図表 1
学生平均定着率 (米 National Training Laboratories) の概念図を日本語化し、数字は省略した。下に行くほど定着率が高いと説明されている。

この図において、いちばん定着率として高い割合を示しているのが「他の人に教えること (Learning Others)」である。学習方法としてハブルータはそれにいちばん適合しているように考えられる。自分の理解していないことを、他の人に教えることはできない。そしてハブルータではお互いに相手に教え合っていると言ってよい。だから、組になった学習方法は効果的なのである。かてて加えて論理的思考力、批判的思考力、受容的態度、チームワーク、創造力などさまざまな能力が培われるのに顕著な効果をあげることができる。

これらのことが可能となった淵源は何であろうか。筆者はユダヤ人の教育熱心さとその家庭環境にあると考ええる。ミシュナにはこう書かれてある。

子どもは五歳にして聖書を、一〇歳にしてミシュナを、十三歳にして十戒を实践し、十五歳にしてゲマラを学ぶべきである。(ミシュナ、アボット 5:24)

実際、新約時代までにシナゴグで子どもたちはトーラー(律法)の他に言語・文法・古代史・道徳・知恵を学んでいた。週末には家族共に安息日を守る。親は子どもに先生の発言やその週に習ったことを問いかける。ここで親と子の対話が交わされ、父親は子どもにアドバイスをする。子どももどんなことでも質問する。これが毎週末の安息日ごとにリラックスした雰囲気で行われる。子どもは質問することに物怖じしなくなる。そしてこの臆することのない態度は学校でも同じようになされるのである。ユダヤの諺に以下のようなものがある。

学ぼうとする生徒は、恥ずかしがってはいけな。忍耐のない人は教師になれない。

この両者に求められる態度はいずれも教育に携わる者に必須である。そしてこの態度がユダヤ人を現代にいたるも知的世界においてリードする存在として際立たせている特徴ではないか。ノーベル賞受賞者に占めるユダヤ人の割合は20パーセントを超えているとされている。そして6部門すべてにユダヤ人の受賞者がいるのである。また、アメリカの大学教授の30パーセント以上がユダヤ人であるとも言われる。

家庭にはじまり、ハブルータ学習においても一貫しているこの教育に向き合う真摯な姿勢はなぜなのだろうか。

その歴史に鍵が隠されている。ユダヤ人は現代まで数千年にわたる歴史のほぼすべての期間、迫害のなかを生きのびてきたのである。知恵がなければ彼らは生きのびることはできなかつただろう。

西川純によれば、アクティブ・ラーニングのメインプレーヤーは、「世界市場のなかで生き残ろうとしている、少子高齢化で傷ついた『日本』」だという⁽²⁾。疲弊した日本が生き残りをかけて世界市場に立ち向かうのなら、数千年を生きのびてきた彼らの知恵を見逃すことはできないのではなからうか。

V. おわりに

以上、ごくハブルータのアウトラインのみを述べてきた。このハブルータ学習法がより良い主体的実践方法の一助になれば、というのが筆者の願いである。しかし、これを単なるハウツーで終わらせるとすれば、おそらく失敗するだろう。生き残りは真剣なものであるから、自らのあらゆる能力を総動員しなければならない。

上述したように、この学習法に会話(対話)は密接不可分のものである。そして彼らの議論にはあらゆることがテーマとなる。表立って議論が憚られるようなタブーがないのである。あれば議論はストップし、思考は停止する。それでは前へ進めない。

イスラエルの発想にはタブーはない。イスラエルの祖先といわれるアブラハムは堂々と神に向かって議論し、取引した(創世記18章22～33節)。エジプト脱出を主導したモーセもまた、なかば神を脅すような発言で神に迫っていった(主エジプト記32章11～14節)。それらの民族的な体験を通してユダヤ的平等の姿勢は彼らの骨髄にまで浸透しているのである。

ハウツーで終わらせないというのはそういう姿勢も身につけるといことである。誰かを憚って何もいえないなら、タブーがあるのと変わらない。グローバルとは(神の前では)上の者も下の者もなく、自由にものが言えるということである。単なる学習方法に終わらないハブルータの深い側面はそこにある。

ここでは触れなかったが、モーティマ・J・アドラーのグレートブックスセミナーもその小グループによる一応用例と考えることもできる。ここではモデレーターと呼ばれる進行役が場を進める。したがって、ハブルータ学習法はトーラーやタルムードのみでないことがわかる。アドラーもユダヤ人であり、その発想は以上に述べたことと重なっているように思える。彼はまた、「シントピコン」と呼ばれる概念を提示している。それはトーラーやタルムードのユダヤ的解釈法を援用しているように思えるが、その詳細については別の機会にゆずりたい。

【注】

(1) ヘブライ語は右から左に書く。文字数は22文字で、一部母音に使用されているが、すべて子音であり、語尾形が5文字ある。古代においてはこれらの子音のみで書き表されたが、後代のマソラ学者によってニクダと呼ばれる字外母音が付されるようになった。

この表記は子音字を大文字で、字外母音を小文字で表したものである。

創世記・ベレシートは (בְּרֵאשִׁית), 出エジプト記・シェモートは (שְׁמוֹת), レピ記・ヴァイクラは (וַיִּקְרָא), 民数記・ヴェミドバルは (בְּמִדְבָּר), 申命記・デヴァリムは, (דְּבָרִים) である。

(2) 西川純, 「サバイバル アクティブ・ラーニング入門」(2016), 100-101

<https://en.wikipedia.org/wiki/Chavrusa>
https://en.wikipedia.org/wiki/Education_in_Israel
<https://blogs.timesofisrael.com/knowledge-the-key-to-jewish-survival/>
<http://www.brandeis.edu/mandel/pdfs/TheoryofHavrutaLearning.pdf>
<https://www.youtube.com/watch?v=0e1rXuDCvuI:Leading Through Havruta 2017- Morasha>
<http://thepeakperformancecenter.com/educational-learning/learning/principles-of-learning/learning-pyramid/:The Peak Performance Center>
<https://drwilda.com/tag/national-training-laboratories/> : DRWILDA

【引用・参考文献】

- 口語訳聖書, 日本聖書協会, 1954
ラビ・M・トケイヤー 著, 加瀬英明 訳, ユダヤ5000年の知恵－聖典タルムード 発想の驚異, 実業之日本社, 1971, 4, 14-15
マーヴィン・トケイヤー 著, 箱崎総一 訳, ユダヤ 知恵の宝石箱, 産業能率大学出版部, 1975, 66
アラン・ウンターマン 著, 石川耕一郎・市川裕 訳, ユダヤ人 その信仰と生活, 筑摩書房, 1983, 67-68
キリスト聖書塾 編, 現代ヘブライ語辞典, キリスト聖書塾, 1984
ピーター・コノリー, 福井芳男, 木村尚三郎 訳, パトリック・レステリーニ 著, イエス・キリストの時代, 東京書籍, 1989, 34
R.C.ムーサフ＝アンドリーセ 著, 市川裕 訳, ユダヤ教聖典入門 トーラーからカバラーまで, 教文館, 1990, 11, 49, 60, 78, 80-97
ピエール・ブリアン著, 矢島文夫 監修, 高野優 訳, ペルシア帝国, 創元社, 1996, 62
ジャン・ボッテロ 著, 松本健 監修, 南條郁子 訳, バビロニア, 創元社, 1996, 34, 44
手島勲矢 編著, わかるユダヤ学, 日本実業出版社, 2002, 101
立山良司 編著, イスラエルを知るための60章, 明石書店, 2012, 100-104, 129
大澤武男 著, ユダヤ人の教養 グローバリズム教育の三千年, 筑摩書房, 2013, 32-40
石角完爾 著, ユダヤ式Why 思考法, 日本能率協会マネジメントセンター, 2015, 60, 64

